

『この恋で決まりですか？』

著：高月まつり

ill：こうじま奈月

「だから優耶……俺と一緒にアメリカに行こう」

何を言ってるんだ？ このクールビューティーは。

だが、この台詞(せりふ)はいただけない。

優耶が想像する政司のアメリカライフには、自分はまったく存在していないのだ。

「な……？ 俺と一緒に……」

政司が「俺と一緒に暮らしてくれ。すべては俺が面倒見る」と付け足す。

この男は、時々とんでもない「お坊ちゃん発言」をする。自分への愛と厚意と善意から出ている台詞なのを知っているだけに、優耶は頭ごなしに叱(しか)ることはできなかった。

だから話をがらりと逸(そ)らすしかない。

優耶はふと車窓に視線を向け、「雪だるまをいっぱい作りたいな……」と大きな声で呟く。

「雪だるまなら、俺がいくらでも作ってやる。だから……」

「駅弁を食べながらする話じゃないし、アメリカ行きに関しては話し合った。お前も納得していたはずだ。どうして今頃になって蒸し返すんだ……？」

頭ごなしに叱りつけるでなく、優しく語りかける。

これはもともと穏やかな優耶の特技だが、最近はそれに磨きがかかっていた。政司が名も知らぬ一年生に「黒騎士様」と呼ばれているのと同じく、優耶は「菩薩様」「観音様」と呼ばれている。

その菩薩が、黒騎士に「どうして？」と尋ねた。

「一緒にいたいから……それだけでは駄目なのか？ 渡米まで二年だ。俺はその二年の間に、日本でやるべきことをすべて終わらせる……そう思って、資料を取り寄せて手にした途端にすべてを実感した。俺は本当にお前と離ればなれになるんだと。自分の思い描いた未来を突き進むのだと。……そして、果たして俺に遠距離恋愛ができるのかと不安になった。優耶なしで生きていけるのか自信がない。何年も離ればなれなんて初めてじゃないか」

政司はそこまで言ってペットボトルの茶を飲み、割り箸を持つ。

優耶もそれに倣(なら)い、二人は無言で弁当を食べ始めた。

さっきまで政司を見てはしゃいでいた女子たちは、今は食事をしながら自分たちの「恋の話」に夢中になっている。

どこかのグループの笑い声や、缶ビールのプルトップを開ける音が聞こえた。

車窓は童話のワンシーンのような雪景色で、飽きることはない。

哀愁たっぷりの警笛に包まれると、その気になれば、どこまでも列車で行けそうな気がした。

年末も押し迫ってきたこの時期に、恋人とのんびりできるなんて幸せだと、優耶は思っていた。就職をしたら今までのようにしょっちゅう会えない。だからそれまでは、二人

で一緒にいられるだけいようと、心に決めていたのだが。

「……空回り、してしまったな」

優耶は俯(うつむ)いたまま、掠(かす)れた声で言う。

政司は気まずい表情で顔を上げた。

「二人で楽しい思い出を作ろうと思っていたのは俺だけか」

「……すまん」

「これから秘湯の温泉宿に行こうっていうときに、そんな話をするとは思わなかった」

「今までずっと、言うタイミングを掴めなかった。しかし俺は……こんなにも空気を読めない男だったとは……」

政司は心の底から申し訳なさそうに言い、自分の弁当に入っているトンカツの一番大きな一切れを優耶の弁当に乗せる。

「あ」

「違う弁当を買って、二人でおかずの分けっこをしようって言ったじゃないか」

そうだった。弁当の見本はどれもこれも旨(うま)そうで、一つに絞りきれなかった結果が「おかずの半分こ」だったのだ。

優耶は小さく頷(うなず)いて、サワラの西京焼きを政司の弁当に乗せた。

「ちよ、優耶。それはお前のメインおかずだろ？ 半分でいい。全部寄越すな」

政司は苦笑を浮かべ、箸で器用に半分に分け、大きい方を優耶の弁当に戻す。

「……二人で、旅の思い出をたくさん作ろうな？ 俺はカメラマンとして、お前を山ほど撮ってやる」

優耶は深く頷き、「ではさっきのアメリカ云(うん)々(ぬん)に関しては封印だ。いいな？」と政司に釘を刺した。

「いや、あの、それは……話を振ったのは優耶だと思うんだが」

「元を辿(たど)れば、ちゃんと言っておかなかった政司が悪い」

「……俺のせいかな？ 俺だけか？ 俺はそもそも……」

政司が渋い表情を見せたので、優耶はずいといと彼に顔を寄せて大胆なことを囁いた。「早く機嫌を直しなさい。……温泉宿では、きっと凄い思い出が作れるだろうな。特に夜。まだ二人でしてないことが山ほどあったはずだ。俺はきっと、拒(こぼ)んだりしないと思うぞ」

優耶は政司を見つめてふわりと微笑む。

誰もを癒す素晴らしい微笑みだが、優耶はそれに加えて、政司の膝に自分の膝をそっと擦(こす)りつけて甘えてみせた。

これは恋人からのエロいお誘いだと理解した政司は、すぐさま機嫌を直して悪役美形のようにニヤリと微笑む。

反対に優耶は、耳まで赤くして「少々、やり過ぎたか」と吐息を漏らした。

「ビールを飲みたくなった」

「何だ突然」

「浮かれてお前に襲いかからないよう、アルコールで欲望を発散する」

そんなことができるのだろうかと思ったが、政司はテーブルに弁当を置いて自動販売機に向かって歩き出す。

その後ろを、数名の女子たちが携帯電話を持って追いかけて行くのを見たが、優耶は気にしない。彼女たちが何を言い、政司がどう返事をするかは長年の経験で分か

る。

……相手を泣かすようなことは言わなくなったからな。

政司よりも先に戻って来た女子たちは「写メだけかー」と残念そうにしていたが、誰も泣いていなかった。むしろ潔(いさぎよ)い顔で「美形ファイルに入れておこう」と笑っている。

女子強い。

優耶はそんな事を思って苦笑する。そこへ缶ビールを何本も持った政司が戻って来た。

「一緒に飲むぞ」

「こんなにいっぱい、定価で買って」

政司は、優耶のテーブルの上に缶ビールを次々と並べ「車内だから定価より高かった。しかし旅には缶ビールとチーカマだ」と断言する。

優耶は「そういうものか」と苦笑を浮かべた。

「ビールを持って車窓を眺めろ。写真を撮ってやる」

政司はそう言うと、バッグの中から愛用のデジタル一眼レフカメラを引っ張り出す。

「いきなりそんなことを言われても」

それでも優耶は、政司の指示に従って缶ビールのプルトップを開けた。

「もっと自然に」

だったら、わざわざ写真を撮ると宣言せずに勝手に撮れよ。

優耶は心の中で突っ込みを入れ、窓の外に視線を向けながら一気にビールを飲んだ。

「オッサンみたいな飲み方をするな」

「政司はうるさい」

優耶はカメラのレンズに顔を近づけ、「まだ弁当も途中だ」と文句を言う。

「ピントが合わなくても、お前は可愛いな」

政司はカメラ越しに優耶を見たまま、真面目な声で言った。

これは冗談ではない。

優耶は耳まで顔を赤くし、「なんでそんなキザなことを」と俯く。

「その顔は、なかなかいい」

やめろ、撮るな……と言っても聞くような男ではない。

優耶は仕方なく、政司が満足するまで被写体になり続けた。

本文 p20～27 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>